

与謝野晶子訳

源氏物語 夕顔卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

夕顔

紫式部

與謝野晶子訳

うき夜半よはの悪夢と共になつかしきゆめ

もあとなく消えにけるかな　（晶子）

源氏が六条に恋人を持っていたころ、御所からそこへ通う途中で、
だいぶ重い病気をし尼になった大貳だいにの乳母めのとを訪ねたずようとし

て、五条辺のその家へ来た。乗ったままで車を入れる大門がしめてあったので、従者に呼び出させた乳母の息子むすこの惟光これみつの来るまで、源氏はりっぱでないその辺の町を車からながめていた。惟光の家の隣に、新しい檜垣ひがきを外囲いにして、建物の前のほうは上げ格子こうしを四、五間ずっと上げ渡した高窓式になっていて、新しく白い簾すだれを掛け、そこからは若いきれいな感じのする額を並べて、何人かの女が外をのぞいている家があった。高い窓に顔が当たっているその人たちは非常に背の高いもののように思われてならない。どんな身分の者の集まっている所だろう。風変わりな家だと源氏には思われた。今日は車も簡素なのにして目だたせない用意

がしてあって、前駆の者にも人払いの声を立てさせなかったから、源氏は自分のだれであるかに町の人も気はつくまいという気楽な心持ちで、その家を少し深くのぞこうとした。門の戸も蔀風しとみふうになっていて上げられてある下から家の全部が見えるほどの簡単なものである。哀れに思ったが、ただ仮の世の相であるから宮も藁屋わらやも同じことという歌が思われて、われわれの住居すまいだって一所いっしょだとも思えた。端隠しのような物に青々とした蔓草つるくさが勢いよくかかっていて、その白い花だけがその辺で見る何よりもうれしそうな顔で笑っていた。そこに白く咲いているのは何の花かという歌を口ずさんでいると、中將の源氏につけられた近衛このえの隨身ずいしんが車

の前に膝ひざをかがめて言った。

「あの白い花を夕顔と申します。人間のような名でございまして、こうした卑しい家の垣根かきねに咲くものでございます」

その言葉どおりで、貧しげな小家がちのこの通りのあちら、こちら、あるものは倒れそうになった家の軒などにもこの花が咲いていた。

「気の毒な運命の花だね。一枝折ってこい」

と源氏が言うと、薮風しとみふうの門のある中へはいつて隨身は花を折った。ちよつとしゃれた作りになっている横戸の口に、黄色の生絹すずしの袴はかまを長めにはいた愛らしい童女が出て来て隨身を招いて、白い

扇を色のつくほど薰物たきもので燻くゆらしたのを渡した。

「これへ載せておあげなさいまし。手で提さげては不恰好ふかつこうな花ですもの」

隨身は、夕顔の花をちようどこの時門をあけさせて出て来た惟光の手から源氏へ渡してもらった。

「鍵かぎの置き所がわかりませんでして、たいへん失礼をいたしました。よいも悪いも見分けられない人の住む界わいではございまして、見苦しい通りにお待たせいたしましたして」

と惟光は恐縮していた。車を引き入れさせて源氏の乳母めのとの家へ下おりた。惟光の兄の阿闍梨あじやり、乳母の婿の三河守みかわのかみ、娘などが皆この

ごろはここに来ていて、こんなふうには源氏自身で見舞いに来てくれたことを非常にありがたがっていた。尼も起き上がっていた。

「もう私は死んでもよいと見られる人間なんでございますが、少しこの世に未練を持っておりましたのはこうしてあなた様にお目にかかるということがあの世ではできませんからでございます。

尼になりました功德くどくで病気が楽になりました、こうしてあなた様の御前へも出られたのですから、もうこれで阿弥あみ陀だ様のお迎えも快くお待ちすることができるよう」

などと言って弱々しく泣いた。

「長い間恢復かいふくしないあなたの病気を心配しているうちに、こんな

ふうに尼になってしまわれたから残念です。長生きをして私の出世する時を見てください。そのあとで死ねば九品蓮台くぼんれんだいの最上位にだって生まれることができるでしょう。この世に少しでも飽き足らない心を残すのはよくないということだから」

源氏は涙ぐんで言っていた。欠点のある人でも、乳母というよ
うな関係でその人を愛している者には、それが非常にりっぱな完
全なものに見えるのであるから、まして養君やしなうぎみがこの世のだれより
もすぐれた源氏の君であっては、自身までも普通の者でないよう
な誇りを覚えている彼女であつたから、源氏からこんな言葉を聞
いてはただうれし泣きをするばかりであつた。息子むすこや娘は母の態

度を飽き足りない齒がゆいもののように思つて、尼になつていながらこの世への未練をお見せするようなものである、俗縁のあつた方に惜しんで泣いていただくのはともかくもだがというような意味を、肱^{ひじ}を突いたり、目くばせをしたりして兄弟どうしで示し合つていた。源氏は乳母を憐^{あわれ}んでいた。

「母や祖母を早く失^なくした私のために、世話する役人などは多数にあつても、私の最も親しく思われた人はあなただったのだ。大^{おと}人になつてからは少年時代のように、いつもいっしょにいることができず、思い立つ時にすぐ^{たず}に訪ねて来るようなこともできないのですが、今でもまだあなたと長く逢^あわないうでいると心細い気が

するほどなんだから、生死の別れというものがなければよいと昔の人が言ったようなことを私も思う」

しみじみと話して、袖そでで涙を拭ふいている美しい源氏を見ては、この方の乳母でありえたわが母もよい前生ぜんしやうの縁を持った人に違いないという気がして、さつきから批難がましくしていた兄弟たちも、しんみりとした同情を母へ持つようになった。源氏が引き受けて、もっと祈き禱とを頼むことなどを命じてから、帰ろうとする時に惟光これみつに蠟燭ろうそくを点ともさせて、さつき夕顔の花の載せられて来た扇あふを見た。よく使い込んであって、よい薰物たきものの香のする扇に、きれいな字で歌が書かれてある。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

散らし書きの字が上品に見えた。少し意外だった源氏は、風流遊戯をしかけた女性に好感を覚えた。惟光に、

「この隣の家にはだれが住んでいるのか、聞いたことがあるか」と言くと、惟光は主人の例の好色癖が出てきたと思った。

「この五、六日母の家におりますが、病人の世話をしておりますので、隣のことはまだ聞いておりません」

惟光^{これみつ}が冷淡に答えると、源氏は、

「こんなことを聞いたのでおもしろく思わないんだね。でもこの

扇が私の興味をひくのだ。この辺のことに詳しい人を呼んで聞いてごらん」

と言った。はいって行つて隣の番人と逢つて来た惟光は、

「地方庁の介すけの名だけをいただいている人の家でございました。

主人は田舎いなかへ行っているそうで、若い風流好きな細君がいて、女房勤めをしているその姉妹たちがよく出入りすると申します。詳しいことは下人げにんで、よくわからないのでございましょう」

と報告した。ではその女房をしているという女たちなのであるうと源氏は解釈して、いい気になって、物馴ものなれた戯れをしかけたものだと思い、下の品であろうが、自分を光源氏と見て詠よんだ歌

をよこされたのに対して、何か言わねばならぬという気がした。
というのは女性にはほだされやすい性格だからである。懐紙ふところかみに、
別人のような字体で書いた。

寄りてこそそれかとも見め黄昏たそがれにほのぼの見つる花の夕顔

花を折りに行つた隨身に持たせてやった。夕顔の花の家の人
は源氏を知らなかったが、隣の家的主人筋らしい貴人はそれらしく
思われて贈つた歌に、返事のないのにきまり悪さを感じていたと
ころへ、わざわざ使いに返歌を持たせてよこされたので、またこ

れに対して何か言わねばならぬなどと皆で言い合ったであろうが、身分をわきまえないしかただと反感を持っていた隨身は、渡す物を渡したただけですぐに帰って来た。

前駆の者が馬上で掲げて行く松明たいまつの明りがほのかにしか光らないで源氏の車は行つた。高窓はもう戸がおろしてあつた。その隙すき間まから螢ほたる以上にかすかな灯ひの光が見えた。

源氏の恋人の六条貴女きじよの邸やしきは大きかつた。広い美しい庭があつて、家の中は気高けだかく上手じょうずに住み馴ならしてあつた。まだまったく源氏の物とも思わせない、打ち解けぬ貴女を扱うのに心を奪われて、もう源氏は夕顔の花を思い出す余裕を持っていなかつたので

ある。早朝の歸りが少しおくれて、日のさしそめたころに出かける源氏の姿には、世間から大騒ぎされるだけの美は十分に備わっていた。

今朝も五条の蔀風の門の前を通った。以前からの通り路ではあるが、あのちよつとしたことに興味を持ってからは、行き来のためにその家が源氏の目についた。幾日かして惟光が出て来た。

「病人がまだひどく衰弱しているものでございますから、どうしてもそのほうの手が離せませんで、失礼いたしました」

こんな挨拶をしたあとで、少し源氏の君の近くへ膝を進めて惟

光朝臣は言つた。

「お話がございましたあとで、隣のことによく通じております者を呼び寄せまして、聞かせたのでございますが、よくは話さないのでございます。この五月ごろからそつと来て同居している人があるようですが、どなたなのか、家の者にもわからせないようにしていますと申すのです。時々私の家との間の垣根かきねから私はのぞいて見るのですが、いかにもあの家には若い女の人たちがいるらしい影が簾すだれから見えます。主人がいなければつけない裳もを言いわけほどこにでも女たちがつけておりますから、主人である女が一人いるに違いございません。昨日きのう夕日がすっかり家の中へさし込んでいました時に、すわって手紙を書いている女の顔が非常にきれ

いでした。物思いがあるふうでございましたよ。女房の中には泣いている者も確かにありました」

源氏はほほえんでいたが、もっと詳しく知りたいと思うふうである。自重をなさらない身分は身分でも、この若さと、この美の備わった方が、恋愛に興味をお持ちにならないで、第三者が見ていても物足らないことである。恋愛をする資格がないように思われているわれわれでさえもずいぶん女のことでは好奇心が動くのであるからと惟光は主人をながめていた。これみつ

「そんなことから隣の家の内の秘密がわからないものでもないと思いますて、ちよつとした機会をとらえて隣の女へ手紙をやって

みました。するとすぐに書き馴^なれた達者な字で返事がまいりました、相当によい若い女房もいるらしいのです」

「おまえは、なおどしどし恋の手紙を送ってやるのだね。それがよい。その人の正体が知れないではなんだか安心ができない」

と源氏が言った。家は下^げの下^げに属するものと品^{しな}定め^{さだ}の人たちになられるはずの所でも、そんな所から意外な趣のある女を見つけ出すことがあればうれしいに違いないと源氏は思うのである。

源氏は空蟬^{うつせみ}の極端な冷淡さをこの世の女の心とは思われないと考えると、あの女が言うままになる女であつたなら、気の毒な過失をさせたということだけで、もう過去へ葬ってしまったかもし

れないが、強い態度を取り続けられるために、負けたくないと思
抗心が起こるのであるとこんなふうに思われて、その人を忘れて
いる時は少ないのである。これまでは空蟬うつせみ階級の女が源氏の心を
引くようなこともなかったが、あの雨夜の品定めを聞いて以来好
奇心はあらゆるものに動いて行つた。何の疑いも持たずに一夜の
男を思っているもう一人の女を憐あわれまないのではないが、冷静にし
ている空蟬にそれが知れるのを、恥ずかしく思つて、いよいよ望
みのないことのわかる日まではと思つてそれきりにしてあるので
あつたが、そこへ伊予介いよのすけが上京して来た。そして真先まっさきに源氏の所
へ伺候した。長い旅をして来たせいで、色が黒くなりやつれた伊

予の長官は見栄みえも何もなかった。しかし家柄もいいものであったし、顔だちなどに老いてもなお整ったところがあって、どこか上品なところのある地方官とは見えた。任地の話などをしだすので、湯の郡こおりの温泉話も聞きたい気はあったが、何ゆえとなしにこの人を見るときまりが悪くなって、源氏の心に浮かんでくることは数々の罪の思い出であった。まじめな生き一本いっぽんの男と対むかつていて、やましい暗い心を抱くとはけしからぬことである。人妻に恋をして三角関係を作る男の愚かさを左馬頭さまのかみの言ったのは真理であると思うと、源氏は自分に対して空蟬の冷淡なのは恨めしいが、この良人おととのためには尊敬すべき態度であると思うようになった。

伊予介が娘を結婚させて、今度は細君を同伴して行くという噂うわさは、二つとも源氏が無関心で聞いていられないことだった。恋人が遠国へつれられて行くと聞いては、再会を気長に待っていていられなくなつて、もう一度だけ逢あうことはできぬかと、小君こぎみを味方にして空蟬に接近する策を講じたが、そんな機会を作ることとは相手の女も同じ目的を持っている場合だつても困難なのであるのに、空蟬のほうでは源氏と恋をすることの不似合いを、思い過ぎるほどに思っていたのであるから、この上罪を重ねようとはしないのであつて、とうてい源氏の思うようにはならないのである。空蟬はそれでも自分が全然源氏から忘れられるのも非常に悲

しいことだと思つて、おりおりの手紙の返事などに優しい心を見
せていた。なんでもなく書く簡単な文字の中に可憐な心かれんが混じつ
ていたり、芸術的な文章を書いたりして源氏の心を惹ひくものが
あつたから、冷淡な恨めしい人であつて、しかも忘れられない女
になつていた。もう一人の女は他人と結婚をしても思いどおりに
動かしうる女だと思つていたから、いろいろな噂を聞いても源氏
は何とも思わなかつた。秋になつた。このごろの源氏はある発展
を遂げた初恋のその続きの苦悶くもんの中にいて、自然左大臣家へ通う
ことも途絶えがちになつて恨めしがられていた。六条の貴女きじよとの
関係も、その恋を得る以前ほどの熱をまた持つことのできない悩

みがあつた。自分の態度によつて女の名譽が傷つくことになつてはならないと思うが、夢中になるほどその人の恋しかつた心と今の心とは、多少懸隔へだたりのあるものだつた。六条の貴女はあまりにものを思い込む性質だつた。源氏よりは八歳上やっつの二十五であつたから、不似合いな相手と恋に墮おちて、すぐにまた愛されぬ物思いに沈む運命なのだろうか、待ち明かしてしまう夜などには煩悶はんもんすることが多かつた。

霧の濃くおりた朝、歸りをそそのかされて、睡ねむそうなふうで歎息たんそくをしながら源氏が出て行くのを、貴女の女房の中將が格子こうしを一間だけ上げて、女主人おんなあるじに見送らせるために几帳きちようを横へ引いてし

まった。それで貴女は頭を上げて外をながめていた。いろいろに咲いた植え込みの花に心が引かれるようで、立ち止まりがちに源氏は歩いて行く。非常に美しい。廊のほうへ行くのに中將が供をして行った。この時節にふさわしい淡紫うすむらさきの薄物の裳もをきれいに結びつけた中將の腰つきが艶えんであつた。源氏は振り返って曲がり角かどの高欄の所へしばらく中將を引き据すえた。なお主従の礼をくずさない態度も額髪ひたいがみのかかりぎわのあざやかさもすぐれて優美な中將だつた。

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎうき今朝けさの朝顔

どうすればいい」

こう言って源氏は女の手を取った。物馴ものなれたふうで、すぐに、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

と言う。源氏の焦点をはずして主人の侍女としての挨拶をしたのである。美しい童侍わらわぎもろいの恰好かっこうのよい姿をした子が、指貫さしぬきの袴はかまを露で濡ぬらしながら、草花の中へは行って行って朝顔の花を持って来たりもするのである、この秋の庭は絵にしたいほどの趣があった。源氏を遠くから知っているほどの人でもその美を敬愛しない

者はない、情趣を解しない山の男でも、休み場所には桜の蔭かげを選ぶようなわけで、その身分身分によって愛している娘を源氏の女房にさせたいと思ったり、相当な女であると思う妹を持った兄が、ぜひ源氏の出入りする家の召使にさせたいとか皆思った。まして何かの場合には優しい言葉を源氏からかけられる女房、この中将のような女はおろそかにこの幸福を思っていない。情人になろうなどとは思ひも寄らぬことで、女主人の所へ毎日おいでになればどんなにうれしいであろうと思っているのであった。

それから、あのこれみ惟光の受け持ちの五条の女の家を探る件、それについて惟光はいろいろな材料を得てきた。

「まだだれであるかは私にわからない人でございます。隠れてい
ることの知れないようにとずいぶん苦心する様子です。閑暇ひまなも
のですから、南のほうの高い窓のある建物のほうへ行つて、車の
音がすると若い女房などは外をのぞくようですが、その主人らし
い人も時にはそちらへ行つてゐることがございます。その人は、
よくは見ませんがずいぶん美人らしゅうございます。この間先払
いの声を立てさせて通る車がございましたが、それをのぞいて女め
の童わらわが後ろの建物のほうへ来て、『右近うこんさん、早くのぞいてごら
んなさい、中将さんが通りをいらつしやいます』と言いますと相
当な女房が出て来まして、『まあ静かになさいよ』と手でおさえ

るようにしながら、『まあどうしてそれがわかったの、私のぞいて見ましょう』と言って前の家のほうへ行くのですね、細い渡り板が通路なんですから、急いで行く人は着物の裾すそを引っかけて倒れたりして、橋から落ちそうになって、『まあいやだ』など大騒ぎで、もうのぞきに出る気もなくなりそうですね。車の人は直衣姿のうしで、隨身たちもありました。だれだれも、だれだれもと数えている名は頭中將とつちちゆうしやうの隨身や少年侍の名でございました」などと言った。

「確かにその車の主が知りたいものだ」

もしかすればそれは頭中將が忘られないように話した常夏とこなつの歌

の女ではないかと思つた源氏の、も少しく探りたいらしい顔色を見たこれみつ惟光は、

「われわれ仲間の恋と見せかけておきまして、実はその上に御主人のいらつしやることもこちらは承知しているのですが、女房相手の安価な恋の奴やつこになりすましております。向こうでは上手じょうずに隠せていると思ひまして私が訪ねて行つてゐる時などに、女の童わらわなどがうっかり言葉をすべらしたりいたしますと、いろいろに言い紛らしまして、自分たちだけだというふうを作ろうといたします」と言つて笑つた。

「おまえの所へ尼さんを見舞いに行つた時に隣をのぞかせてく

れ」

と源氏は言っていた。たとえば仮住まいであつてもあの五条の家にいる人なのだから、下の品の女であろうが、そうした中におもしろい女が発見できればと思うのである。源氏の機嫌きげんを取ろうと一所懸命の惟光であつたし、彼自身も好色者で他の恋愛にさえも興味を持つほうであつたから、いろいろと苦心をした末に源氏を隣の女の所へ通わせるようにした。

女のだれであるかをぜひ知ろうともしないとともに、源氏は自身の名もあらわさずに、思いきり質素なふうをして多くは車にも乗らずに通った。深く愛しておらねばできぬことだと惟光は解釈

して、自身の乗る馬に源氏を乗せて、自身は徒歩で供をした。

「私から申し込みを受けたあすこの女はこの態ていを見たら驚くでしょう」

などとこぼしてみせたりしたが、このほかには最初夕顔の花を折りに行った隨身と、それから源氏の召使であるともあまり顔を知られていない小侍だけを供にして行った。それから知れることになってはとの気づかいから、隣の家へ寄るようなこともしない。女のほうでも不思議でならない気がした。手紙の使いが来るとそつと人をつけてやったり、男の夜明けの帰りに道を窺うかがわせたりしても、先方は心得ていてそれらをはぐらかしてしまった。し

かも源氏の心は十分に惹^ひかれて、一時的な関係にとどめられる気はしなかった。これを不名誉だと思う自尊心に悩みながらしばしば五条通いをした。恋愛問題ではまじめな人も過失をしがちなものであるが、この人だけはこれまで女のこととで世間の批難を招くようなことをしなかったのに、夕顔の花に傾倒してしまった心だけは別だった。別れ行く間も昼の間もその人をかたわらに見がたい苦痛を強く感じた。源氏は自身で、氣違いいじみたことだ、それほどの価値がどこにある恋人かなどと反省もしてみるのである。驚くほど柔らかかでおおような性質で、深味のあるような人でもない。若々しい一方の女であるが、処女であつたわけでもない。貴

婦人ではないようである。どこがそんなに自分を惹きつけるのであろうと不思議でならなかった。わざわざ平生の源氏に用のない狩衣^{かりぎぬ}などを着て変装した源氏は顔なども全然見せない。ずっと更^ふけてから、人の寝静まったあとで行ったり、夜のうちに帰ったりするのであるから、女のほうでは昔の三輪^{みわ}の神の話のような気がして気味悪く思われないではなかった。しかしどんな人であるかは手の触覚からでもわかるものであるから、若い風流男以外な者に源氏を観察していない。やはり好色な隣の五位^{ごい}が導いて来た人に違いないと惟光^{これみつ}を疑っているが、その人はまったく気がつかぬふうで相変わらず女房の所へ手紙を送って来たり、訪ね^{たず}て来たり

するので、どうしたことかと女のほうでも普通の恋の物思いとは違った煩悶はんもんをしていた。源氏もこんなに真実を隠し続ければ、自分も女のだれであるかを知りようがない、今の家が仮すまいの住居であることは間違いのないことらしいから、どこかへ移って行ってしまうた時に、自分は呆然ぼうぜんとするばかりであろう。行くえを失ってもあきらめがすぐつくものならよいが、それは断然不可能である。世間をはばかって間を空あける夜などは堪えられない苦痛を覚えるのだと源氏は思つて、世間へはだれとも知らせないで二条の院へ迎えよう、それを悪く言われても自分はそうなる前生の因縁だと思ふほかはない、自分ながらもこれほど女に心を惹ひかれた経

験が過去にないことを思うと、どうしても約束事と解釈するのが至当である、こんなふうには源氏は思つて、

「あなたもその気におなりなさい。私は気楽な家へあなたをつれて行つて夫婦生活がしたい」こんなことを女に言い出した。

「でもまだあなたは私を普通には取り扱っていらつしやらない方なんですから不安で」

若々しく夕顔が言う。源氏は微笑された。

「そう、どちらかが狐きつねなんだろうね。でも欺だまされていらつしやればいいじゃない」

なつかしいふうには源氏が言う、女はその気になつていく。ど

んな欠点があるにしても、これほど純な女を愛せずにはいられないではないかと思った時、源氏は初めからその疑いを持っていたが、とつちのちゆうじょう 頭中將の常夏の女はいよいよこの人らしいという考えが浮かんだ。しかし隠しているのはわけのあることであらうからと想つて、しいて聞く気にはなれなかった。感情を害した時などに突然そむいて行ってしまうような性格はなさそうである、自分が途絶えがちになったりした時には、あるいはそんな態度に出るかもしれぬが、自分ながら少し今の情熱が緩和された時にかえって女によさがわかるのではないかと、それを望んでもできないのだから途絶えの起こってくるわけはない、したがって女の気持ちを不安

に思う必要はないのだと知っていた。

八月の十五夜であつた。明るい月光が板屋根の隙間すきまだらけの家の中へさし込んで、狭い家の中の物が源氏の目に珍しく見えた。もう夜明けに近い時刻なのであろう。近所の家々で貧しい男たちが目をさまして高声で話すのが聞こえた。

「ああ寒い。今年ことしこそもう商売のうまくいく自信が持てなくなつた。地方廻りもできそうでないんだから心細いものだ。北隣さん、まあお聞きなさい」

などと言っているのである。哀れなその日その日の仕事のために起き出して、そろそろ労働を始める音なども近い所でするのを

女は恥ずかしがっていた。氣どつた女であれば死ぬほどきまりの悪さを感じる場所に違いない。でも夕顔はおおようにしていた。人の恨めしさも、自分の悲しさも、体面の保たれぬきまり悪さも、できるだけ思ったとは見せまいとするふうで、自分自身は貴族の子らしく、娘らしくて、ひどい近所の会話の内容もわからぬようであるのが、恥じ入られたりするよりも感じがよかった。ごほごほと雷以上の恐い音こわをさせる唐臼からうすなども、すぐ寢床のそばで鳴るように聞こえた。源氏もやかましいとこれは思った。けれどもこの貴公子も何から起こる音とは知らないのである。大きなたまらぬ音響のする何かだと思っていた。そのほかにもまだ多くの

騒がしい雑音が聞こえた。白い麻布を打つ砧きぬたのかすかな音もあちこちにした。空を行く雁かりの声もした。秋の悲哀がしみじみと感じられる。庭に近い室であつたから、横の引き戸を開けて二人で外をながめるのであつた。小さい庭にしゃれた姿の竹が立って、草の上の露はこんなところのも二条の院の前栽せんざいのに変わらずきらきらと光っている。虫もたくさん鳴いていた。壁の中で鳴くといわれて人間の居場所に最も近く鳴くものになっている蟋蟀こおろぎでさえも源氏は遠くの声だけしか聞いていなかったが、ここではどの虫も耳のそばへとまっつて鳴くような風変わりな情趣だと源氏が思うのも、夕顔を深く愛する心が何事も悪くは思わせないのであ

ろう。白い衿あわせに柔らかい淡紫うすむらさきを重ねたはなやかな姿ではない、
ほっそりとした人で、どこかきわだって非常によいところ
はないが繊細な感じのする美人で、ものを言う様子に弱々しい可かれ
憐んさが十分にあった。才氣らしいものを少しこの人に添えたらと
源氏は批評的に見ながらも、もっと深くこの人を知りたい気がし
て、

「さあ出かけましょう。この近くのある家へ行つて、気楽に明日あす
まで話しましょう。こんなふうでいつも暗い間に別れていかなけ
ればならないのは苦しいから」

と言うと、

「どうしてそんなに急なことをお言い出しになりますの」

おおように夕顔は言っていた。変わらぬ恋を死後の世界にまで続けようと源氏の誓うのを見ると何の疑念もはさまずに信じてよろこぶ様子などのうぶさは、一度結婚した経験のある女とは思えないほど可憐であつた。源氏はもうだれの思わくもはばかりがなくなつて、右近うこんに隨身を呼ばせて、車を庭へ入れることを命じた。夕顔の女房たちも、この通う男が女主人を深く愛していることを知っていたから、だれともわからずにいながら相当に信頼していた。

ずっと明け方近くなつてきた。この家に鶏とりの声は聞こえない

で、現世利益りやくの御岳教みたけきょうの信心なのか、老人らしい声で、起たったりすわったりして、とても忙しく苦しそうにして祈る声が聞かれた。源氏は身にしむように思っ、朝露と同じように短い命を持つ人間が、この世に何の慾よくを持って祈きとうなどをするのだろうと聞いているうちに、

「南無なむ当来とうらいの導師」

と阿弥陀如来あみだにょらいを呼びかけた。

「そら聞いてごらん。現世利益だけが目的じゃなかった」とほめて、

優婆塞うばそくが行なふ道をしるべにて来ん世も深き契りたがふな

とも言った。玄宗げんそうと楊貴妃ようきひの七月七日の長生殿の誓いは実現され
ない空想であつたが、五十六億七千万年後の弥勒菩薩みろくぼさつ出現の世
までも変わらぬ誓いを源氏はしたのである。

前さきの世の契り知らるる身のうさに行く末かけて頼みがたさよ

と女は言った。歌を詠よむ才なども豊富であろうとは思われな
い。月夜に出れば月に誘惑されて行つて歸らないことがあるとい

うことを思つて出かけるのを躊躇^{ちゆうちゆう}する夕顔に、源氏はいろいろに言つて同行を勧めているうちに月もはいつてしまつて東の空の白む秋のしのめが始まつてきた。

人目を引かぬ間にと思つて源氏は出かけるのを急いだ。女のからだを源氏が軽々と抱いて車に乗せ右近が同乗したのであつた。

五条に近い帝室の後院である某院へ着いた。呼び出した院の預かり役の出て来るまで留めてある車から、忍ぶ草の生^おい茂つた門の廂^{ひさし}が見上げられた。たくさんにある大木が暗さを作っているのである。霧も深く降つていて空気の湿^{しめ}っぽいのに車の簾^{すだれ}を上げさせてあつたから源氏の袖^{そで}もそのうちべったりと濡^ぬれてしまった。

「私にははじめての経験だが妙に不安なものだ。

いにしへもかくやは人の惑ひけんわがまだしらぬしのめの
道

前にこんなことがありましたか」

と聞かれて女は恥ずかしそうだった。

「山の端^はの心も知らず行く月は上^{うは}の空にて影や消えなん

心細うございます、私は」

凄^{すご}さに女がおびえてもいるように見えるのを、源氏はあの小さい家におおぜい住んでいた人なのだから道理であると思っておかしかった。

門内へ車を入れさせて、西の対^{たい}に仕度^{したく}をさせている間、高欄に車の柄を引っかけて源氏らは庭にいた。右近は艶^{えん}な情趣を味わいながら女主人の過去の恋愛時代のある場面なども思い出されるのであった。預かり役がみずから出てする客人の扱いが丁寧きわまるものであることから、右近にはこの風流男の何者であるかがわかった。物の形がほのぼの見えるところに家へはいった。にわかな

仕度ではあったが体裁よく座敷がこしらえてあった。

「だれというほどの人がお供しておらないなどとは、どうもいやはや」

などといって預かり役は始終出入りする源氏の下家司しもけいしでもあったから、座敷の近くへ来て右近に、

「御家司をどなたかお呼び寄せしたものでございましょうか」
と取り次がせた。

「わざわざだれにもわからない場所にここを選んだのだから、おまえ以外の者にはすべて秘密にしておいてくれ」

と源氏は口留めをした。さっそくに調えられた粥かゆなどが出た。

給仕も食器も間に合わせを忍ぶよりほかはない。こんな経験を持たぬ源氏は、一切を切り放して気にかけぬこととして、恋人とはばかり語り合う愉楽に酔おうとした。

源氏は昼ごろに起きて格子を自身で上げた。非常に荒れていて、人影などは見えずにはるばると遠くまでが見渡される。向このほうの木立ちは気味悪く古い大木に皆なっていた。近い植え込みの草や灌木かんぼくなどには美しい姿もない。秋の荒野の景色けしきになっている。池も水草でうずめられた凄すごいものである。別れた棟むねのほうに部屋へやなどを持って預かり役は住むらしいが、そこそこことはよほど離れている。

「気味悪い家になっている。でも鬼なんかだって私だけはどうともしなからう」

と源氏は言った。まだこの時までは顔を隠していたが、この態度を女が恨めしがっているのを知って、何たる錯誤だ、不都合なのは自分である、こんなに愛していながらと気がついた。

「夕露にひもとく花は玉鉾たまぼこのたよりに見えし縁えにこそありけれ

あなたの心あてにそれかと思うと言った時の人の顔を近くに見て幻滅が起こりませんか」

と言う源氏の君を後目しりめに女は見上げて、

光ありと見し夕顔のうは露は黄昏時たそがれどきのそら目なりけり

と言った。冗談じょうたんまでも言う気になったのが源氏にはうれしかった。打ち解けた瞬間から源氏の美はあたりに放散した。古くさく荒れた家との対照はまして魅惑的だった。

「いつまでも真実のことを打ちあけてくれないのが恨めしくつて、私もだれであるかを隠し通したのだが、負けた。もういいでしょう、名を言ってください、人間離れがあまりしすぎます」

と源氏が言っても、

「家も何もない女ですもの」

と言つてそこまではまだ打ち解けぬ様子も美しく感ぜられた。

「しかたがない。私が悪いのだから」

と怨^{うら}んでみたり、永久の恋の誓いをし合つたりして時を送つた。

惟^{これみつ}光が源氏の居所を突きとめてきて、用意してきた菓子などを座敷へ持たせてよこした。これまで白^{しろ}ばくれていた態度を右^う近^{こん}に恨まれるのがつらくて、近い所へは顔を見せない。惟光は源氏が人騒がせに居所を不明にして、一日を犠牲にするまで熱心になり

うる相手の女は、それに価する者であるらしいと想像をして、当然自己のものになしうるはずの人を主君にゆずった自分は広量なものだと嫉妬しつとに似た心で自嘲じちようもし、羨望せんぼうもしていた。

静かな静かな夕方の空をながめていて、奥のほうは暗くて気味が悪いと夕顔が思うふうなので、縁の簾すだれを上げて夕映ゆうばえの雲をいっしょに見て、女も源氏とただ二人で暮らしえた一日に、まだまったく落ち着かぬ恋の境地とはいえ、過去に知らない満足が得られたらしく、少しずつ打ち解けた様子が可憐かれんであつた。じつと源氏のそばへ寄つて、この場所がこわくてならぬふうであるのがいかにも若々しい。格子こうしを早くおろして灯ひをつけさせてからも、

「私のほうにはもう何も秘密が残っていないのに、あなたはまだ
そうでないのだからいけない」

などと源氏は恨みを言っていた。陛下はきつと今日も自分をお
召しになったに違いないが、捜す人たちはどう見当をつけてどこ
へ行っているだろう、などと想像をしながらも、これほどまでに
この女を溺愛^{できあい}している自分を源氏は不思議に思った。六条の貴女^{きじよ}
もどんなに煩悶^{はんもん}をしていることだろう、恨まれるのは苦しいが恨
むのは道理であると、恋人のことはこんな時にもまず気にかかつ
た。無邪気に男を信じていっしょにいる女に愛を感じるととも
に、あまりにまで高い自尊心にみずから煩わ^{わづら}されている六条の貴

女が思われて、少しその点を取り捨てたならと、眼前の人に比べて源氏は思うのであった。

十時過ぎに少し寝入った源氏は枕まくらの所に美しい女がすわっているのを見た。

「私がどんなにあなたを愛しているかshれないのに、私を愛さないで、こんな平凡な人をつれていらっしって愛撫あいぶなさるのはあまりにひどい。恨めしい方」

と言って横にいる女に手をかけて起こそうとする。こんな光景を見た。苦しい襲われた気持ちになって、すぐ起きると、その時に灯ひが消えた。不気味なので、太刀たちを引き抜いて枕もとに置いて

て、それから右近を起こした。右近も恐ろしくてならぬというふうで近くへ出て来た。

「わたどの渡殿とのいにいる宿直とくのいの人を起こして、ろうそく蝋燭をつけて来るように言うがいい」

「どうしてそんな所へまで参れるものでございますか、暗くらうて」「子供らしいじゃないか」

笑って源氏が手をたたくとそれが反響になった。限りない気味悪さである。しかもその音を聞きつけて来る者はだれもない。夕顔は非常にこわがってふるえていて、どうすればいいだろうと思うふうである。汗をずっぷりとかいて、意識のありなしも疑わし

い。

「非常に物恐れをなさいます御性質ですから、どんなお気持ちになさるのでございましょうか」

と右近も言った。弱々しい人で今日の昼間も部屋へやの中を見まわすことができずに空をばかりながめていたのであるからと思うと、源氏はかわいそうでならなかった。

「私が行って人を起こそう。手をたたくと山彦やまびこがしてうるさくならない。しばらくの間ここへ寄っていてくれ」

と言って、右近を寢床のほうへ引き寄せておいて、両側の妻戸の口へ出て、戸を押しあけたのと同時に渡殿についていた灯も消

えた。風が少し吹いている。こんな夜に侍者は少なくて、しかもありたけの人は寝てしまっていた。院の預かり役の息子で、平生源氏が手もとで使っていた若い男、それから侍童が一人、例の隨身、それだけが宿直とのいをしていたのである。源氏が呼ぶと返辞をして起きて来た。

「蠟燭ろうそくをつけて参れ。隨身に弓の絃打つるうちをして絶えず声を出して魔性に備えるように命じてくれ。こんな寂しい所で安心をして寝ていていいわけではない。先刻せんこく惟光これみつが来たと言っていたが、どうしたか」

「参っておりますが、御用事もないから、夜明けにお迎えに参

ると申して帰りましてございます」

こう源氏と問答をしたのは、御所の滝口に勤めている男であつたから、専門家的に弓絃ゆづるを鳴らして、

「火危あぶなし、火危し」

と言いながら、父である預かり役の住居すまいのほうへ行つた。源氏はこの時刻の御所を思った。殿上てんじょうの宿直役人が姓名を奏上する名対面はもう終わっているだろう、滝口の武士の宿直の奏上があるころであると、こんなことを思ったところをみると、まだそう深更でなかったに違いない。寢室へ帰って、暗がりの中を手で探ると夕顔はもとのままの姿で寝ていて、右近がそのそばでうつ伏せ

になっていた。

「どうしたのだ。気違いじみたこわがりようだ。こんな荒れた家などというものは、狐きつねなどが人をおどしてこわがらせるのだよ。

私がおればそんなものにおどかさねはしないよ」

と言って、源氏は右近を引き起こした。

「とても気持ちが悪うございますので下を向いておりました。奥様はどんなお気持ちでいらっしゃいますことでしょうか」

「そうだ、なぜこんなにばかりして」

と言って、手で探ると夕顔は息もしていない。動かしてみてもなよなよとして気を失っているふうであつたから、若々しい弱い

人であつたから、何かの物怪もののけにこうされているのであらうと思うと、源氏は歎息たんそくされるばかりであつた。蠟燭ろうそくの明りが来た。右近には立つて行くだけの力がありそうもないので、閨ねやに近い几帳きちようを引き寄せてから、

「もつとこちらへ持つて来い」

と源氏は言った。主君の寢室の中へはいるというまったくそんな不謹慎な行動をしたことがない滝口は座敷の上段になった所へもよう来ない。

「もつと近くへ持つて来ないか。どんなことも場所によることだ」

灯^ひを近くへ取って見ると、この閨の枕の近くに源氏が夢で見たとおりの容貌^{ようぼう}をした女が見えて、そしてすっと消えてしまった。昔の小説などにはこんなことも書いてあるが、実際にあるとは思うと源氏は恐ろしくてならないが、恋人はどうなったかという不安が先に立って、自身がどうされるだろうかという恐れはそれほどなくて横へ寝て、

「ちよいと」

と言って不気味な眠りからさませようとするが、夕顔のからだは冷えはてていて、息はまったく絶えているのである。頼りにできる相談相手もない。坊様などはこんな時の力になるものであ

るがそんな人もむろんここにはいない。右近に対して強がって何かと言った源氏であつたが、若いこの人は、恋人の死んだのを見ると分別も何もなくなつて、じつと抱いて、

「あなた。生きてください。悲しい目を私に見せないで」

と言つていたが、恋人のからだはますます冷たくて、すでに人ではなく遺骸いがいであるという感じが強くなつていく。右近はもう恐怖心も消えて夕顔の死を知つて非常に泣く。紫宸殿ししんでんに出て来た鬼は貞信公ていしんこうを威嚇いかくしたが、その人の威に押されて逃げた例などを思い出して、源氏はしいて強くなろうとした。

「それでもこのまま死んでしまうことはないだろう。夜というも

のは声を大きく響かせるから、そんなに泣かないで」

と源氏は右近に注意しながらも、恋人との歓会がたちまちにこ
うなったことを思うと呆然^{ぼうぜん}となるばかりであつた。滝口を呼ん
で、

「ここに、急に何かに襲われた人があつて、苦しんでいるから、
すぐに惟光^{これみつあそん}朝臣の泊まっている家に行つて、早く来るように言え
とだれかに命じてくれ。兄の阿闍梨^{あじやり}がそこに来ているのだった
ら、それもいいしょに来るようにと惟光に言わせるのだ。母親の
尼さんなどが聞いて気にかけるから、たいそうには言わせないよ
うに。あれは私の忍び歩きなどをやかましく言つて止める人だ」

こんなふうに順序を立ててものを言いながらも、胸は詰まるよう
うで、恋人を死なせることの悲しさがたまらないものに思われる
のといっしょに、あたりの不気味さがひしひしと感ぜられるので
あった。もう夜中過ぎになっているらしい。風がさつきより強く
なつてきて、それに鳴る松の枝の音は、それらの大木に深く囲ま
れた寂しく古い院であることを思わせ、一風変わった鳥がかれ声
で鳴き出すのを、梟きうとはこれであろうかと思われた。考えてみる
とどこへも遠く離れて人声もしないこんな寂しい所へなぜ自分は
泊まりに来たのであらうと、源氏は後悔の念もしきりに起こる。
右近は夢中になって夕顔のそばへ寄り、このまま慄ふるえ死にをする

のではないかと思われた。それがまた心配で、源氏是一所懸命に右近をつかまえていた。一人は死に、一人はこうした正体もないふうで、自身一人だけが普通の人間なのであると思うと源氏はたまらない気がした。灯はほのかに瞬またたいて、中央の室との仕切りの所に立てた屏風びょうぶの上とか、室の中の隅々すみずみとか、暗いところの見えるここへ、後ろからひしひしと足音をさせて何かが寄って来る気がしてならない、惟光が早く来てくれればよいとばかり源氏は思った。彼は泊まり歩く家を幾軒も持った男であつたから、使いはあちらこちらと尋ねまわっているうちに夜がぼつぼつ明けてきた。この間の長さは千夜にもあたるように源氏には思われたのである。

る。やっとはるかな所で鳴く鶏の聲がしてきたのを聞いて、ほつとした源氏は、こんな危険な目にどうして自分はいうのだろう、自分の心ではあるが恋愛についてはもったいない、思うべからざる人を思った報いに、こんな後にも前にもない例となるようなはじめな目にあうのであるう、隠してもあつた事實はすぐに噂になるであろう、陛下の思召しをはじめとして人が何と批評することだろう、世間の嘲笑が自分の上に集まることであるう、とうとうついにこんなことで自分は名誉を傷つけるのだなと源氏は思っていた。

やっと惟光これみつが出て来た。夜中でも暁でも源氏の意のままに従つ

て歩いた男が、今夜に限ってそばにおらず、呼びにやってもすぐの間に合わず、時間のおくれたことを源氏は憎みながらも寢室へ呼んだ。孤独の悲しみを救う手は惟光にだけあることを源氏は知っている。惟光をそばへ呼んだが、自分が今言わねばならぬことがあまりにも悲しいものであることを思うと、急には言葉が出ない。右近は隣家の惟光が来た^{けはい}気配に、亡^なき夫人と源氏との交渉の最初の時から今日までが連続的に思い出されて泣いていた。源氏も今までは自身一人が強い人になって右近を抱きかかえていたのであったが、惟光の来たのにほっとすると同時に、はじめて心の底から大きい悲しみが湧^わき上がってきた。非常に泣いたのちに

源氏は躊躇ちゆうちゆうしながら言い出した。

「奇怪なことが起こったのだ。驚くという言葉では現わせないよ
うな驚きをさせられた。人のからだにこんな急変があったりする
時には、僧家へ物を贈って読経どきようをしてもらうものだそうだから、
それをさせよう、願を立てさせようと思って阿闍梨あじやりも来てくれと
言ってやったのだが、どうした」

「昨日叡山きのうえいざんへ帰りましたのでございます。まあ何ということでご
ざいましょう、奇怪なことでございます。前から少しはおからだ
が悪かったのでございますか」

「そんなこともなかった」

と言つて泣く源氏の様子に、惟光も感動させられて、この人までが声を立てて泣き出した。老人はめんどうなものとされているが、こんな場合には、年を取つていて世の中のいろいろな経験を持っている人が頼もしいのである。源氏も右近も惟光も皆若かつた。どう処置をしていいのか手が出ないのであつたが、やっと惟光が、

「この院の留守役などに真相を知らせることはよくございません。当人だけは信用ができません、秘密の洩れもやすい家族を持っていますから。ともかくもここを出ていらつしやいませ」

と言った。

「でもここ以上に人の少ない場所はほかにないじゃないか」

「それはそうでございます。あの五条の家は女房などが悲しがつて大騒ぎをするでしょう、多い小家の近所隣へそんな声が聞こえますとたちまち世間へ知れてしまいます、山寺と申すものはこうした死人などを取り扱い馴^なれておりましようから、人目を紛らすのには都合がよいように思われます」

考えるふうだった惟光は、

「昔知っております女房が尼になって住んでいる家が東山にございますから、そこへお移しいたしまししよう。私の父の乳母^{めのと}をして

おりまして、今は老人としよりになっっている者の家でございます。東山ですから人がたくさん行く所のようにではございますが、そこだけは閑静です」

と言って、夜と朝の入り替わる時刻の明暗の紛れに車を縁側へ寄せさせた。源氏自身が遺骸いがいを車へ載せることは無理らしかったから、莫蔭もえんに巻いて惟光これみつが車へ載せた。小柄な人の死骸からは悪感を受けないできわめて美しいものに思われた。残酷に思われるような扱い方を遠慮して、確かにも巻かなんだから、莫蔭の横から髪が少しこぼれていた。それを見た源氏は目がくらむような悲しみを覚えて煙になる最後までも自分がついていたという気に

なつたのであるが、

「あなた様はさつそく二条の院へお帰りなさいませ。世間の者が起き出しませんうちに」

と惟光は言つて、遺骸には右近を添えて乗せた。自身の馬を源氏に提供して、自身は徒歩で、袴はかまのくくりを上げたりして出かけたのであつた。ずいぶん迷惑な役のようにも思われたが、悲しんでいる源氏を見ては、自分のことなどはどうでもよいという氣に惟光はなつたのである。

源氏は無我夢中で二条の院へ着いた。女房たちが、

「どちらからのお帰りなんでしょう。御氣分がお悪いようです

よ」

などと言っているのを知っていたが、そのまま寢室へはいって、そして胸をおさえて考えてみると自身が今経験していることは非常な悲しいことであるということがわかった。なぜ自分はあの車に乗って行かなかったのだろう、もし蘇生^{そせい}することがあったらあの人はどう思うだろう、見捨てて行ってしまったと恨めしく思わないだろうか、こんなことを思うと胸がせき上がってくるよ
うで、頭も痛く、からだには発熱も感ぜられて苦しい。こうして自分も死んでしまうのであろうと思われるのである。八時ごろになっても源氏が起きぬので、女房たちは心配をしだして、朝の食

事を寢室の主人へ勧めてみたが無駄^{むだ}だった。源氏は苦しくて、そして生命^{いのち}の危険が迫ってくるような心細さを覚えていると、宮中のお使いが来た。帝^{みかど}は昨日^{きのう}もお召しになった源氏を御覧になれなかったことで御心配をあそばされるのであった。左大臣家の子息たちも訪問して来たがそのうちの頭中將^{とつちゆうじやう}にだけ、

「お立ちになったまままでちよつとこちらへ」

と言わせて、源氏は招いた友と御簾^{みす}を隔てて対した。

「私の乳母^{めのと}の、この五月ごろから大病をしていました者が、尼になつたりなどしたものですから、その効験^{ききめ}でか一時快^よくなつていました。が、またこのごろ悪くなりまして、生前にもう一度だけ訪

問をしてくれなどと言ってきたので、小さい時から世話になつた者に、最後に恨めしく思わせるのは残酷だと思つて、訪問しましたところがその家の召使の男が前から病氣をしていて、私のいるうちに亡^なくなつたのです。恐縮して私に隠して夜になつてからそつと遺骸を外へ運び出したということを私は気がついたので、御所では神事に関した御用の多い時期ですから、そうした穢^{けが}れに触れた者は御遠慮すべきであると思つて謹慎をしているのです。それに今朝方^{けさがた}からなんだか風邪^{かぜ}にかかったのですか、頭痛がして苦しいものですからこんなふうで失礼します」

などと源氏は言うのであつた。中將は、

「ではそのように奏上しておきましょう。昨夜も音楽のありました時に、御自身でお指図さしずをなさいましてあちこちとあなたをお捜させになったのですが、おいでにならなかったのも、御機嫌ごきげんがよろしくありませんでした」

と言つて、帰ろうとしたがまた歸つて来て、

「ねえ、どんな穢けがれにおあいになったのですか。さつきから伺つたのはどうもほんとうとは思われない」

と、頭中将から言われた源氏ははつとした。

「今お話したようにこまかにではなく、ただ思いがけぬ穢れにありましたと申し上げてください。こんなので今日は失礼しま

す」

素知らず顔には言っ^ていても、心にはまた愛人の死が浮か^んできて、源氏は気分も非常に悪くな^った。だれの顔も見^るのが物憂^{ものう}かつた。お使いの蔵人^{くらうど}の弁^{べん}を呼^よんで、またこまごまと頭中將に語^かつたよう^ゆな行触^{ゆきぶ}れの事情を帝へ取り次^{つぎ}いでもら^うつた。左大臣家のほうへもそんなことで行^いかれぬという手紙が行^いつたのである。

日が暮^くれてから惟光^{これみつ}が来^きた。行触^{ゆきぶ}れの件を發表したので、二条の院への来訪者は皆庭から取り次^{つぎ}ぎをも^もつて用事を申し入^いれて歸^{かえ}つて行くので、め^めんど^んうな人はだれも源氏の居間にい^いなかつた。惟光を見^みて源氏は、

「どうだった、だめだったか」

と言うと同時に袖を顔へ当てて泣いた。惟光も泣く泣く言う、
「もう確かにお亡れになったのでございます。いつまでお置きし
てもよくないことでございますから、それにちょうど明日は葬式
によい日でしたから、式のことなどを私の尊敬する老僧がありま
して、それとよく相談をして頼んでまいりました」

「いっしょに行った女は」

「それがまたあまりに悲しがりまして、生きていられないという
ふうなので、今朝は溪へ飛び込むのではないかと心配されました。
五条の家へ使いを出すというのですが、よく落ち着いてからにし

なければいけないと申して、とにかく止めてまいりました」

惟光の報告を聞いているうちに、源氏は前よりもいっそう悲しくなつた。

「私も病気になつたようで、死ぬのじゃないかと思う」と言つた。

「そんなふうにまでお悲しみになるのでございますか、よろしく
ございません。皆運命でございます。どうかして秘密のうちに処
置をしたいと思ひまして、私も自身でどんなこともしているので
ございますよ」

「そうだ、運命に違ひない。私もそう思うが軽率な恋愛漁りか

ら、人を死なせてしまったという責任を感じるのだ。君の妹の少将の命婦^{みょうぶ}などにも言うなよ。尼君なんかはまたいつもああいったふうのことをよくないよくないと小言^{こごと}に言うほうだから、聞かれ
ては恥ずかしくてならない」

「山の坊さんたちにもまるで話を変えてしてございます」

と惟光が言うので源氏は安心したようである。主従がひそひそ話をしているのを見た女房などは、

「どうも不思議ですね、行触^{ゆきふ}れだとお言いになって参内もなさらないし、また何か悲しいことがあるようにあんなふうにして話していらっしゃる」

腑^ふに落ちぬらしく言っていた。

「葬儀はあまり簡単な見苦しいものにしないほうがよい」

と源氏が惟光^{これみつ}に言った。

「それでもございません。これは大層^{たいそう}にいたしてよいことではございません」

と否定してから、惟光が立って行こうとするのを見ると、急にまた源氏は悲しくなった。

「よくないことだとおまえは思うだろうが、私はもう一度遺骸^{いがい}を見たいのだ。それをしないではいつまでも憂鬱^{ゆううつ}が続くように思われるから、馬ででも行こうと思うが」

主人の望みを、とんでもない軽率なことであると思いながらも
惟光は止めることができなかった。

「そんなに思召すおぼしめのならしかたがございません。では早くいらつ
しやいまして、夜の更ふけぬうちにお帰りなさいませ」

と惟光は言った。五条通いの変装のために作らせた狩衣かりぎぬに着更きが
えなどして源氏は出かけたのである。病苦が朝よりも加わったこ
ともわかっていて源氏は、軽はずみにそうした所へ出かけて、そ
こでまたどんな危険が命をおびやかすかもしれない、やめたほう
がいいのではないかとも思ったが、やはり死んだ夕顔に引かれる
心が強くて、この世での顔を遺骸で見ておかなければ今後の世界

でそれは見られないのであるという思いが心細さをおさえて、例
の惟光と隨身を従えて出た。非常に路の^{みち}はかがゆかぬ気がした。
十七日の月が出てきて、加茂川の河原を通るころ、前駆の者の持
つ^{たいまつ}松明の淡い明りに鳥辺野の^{とりべの}ほうが見えるというこんな不気味な
景色^{けしき}にも源氏の恐怖心はもう麻痺^{まひ}してしまっていた。ただ悲しみ
に胸が掻き乱^かされたふうで目的地に着いた。凄^{すご}い気のする所であ
る。そんな所に住居^{すまい}の板屋があつて、横に御堂^{みどう}が続いているので
ある。仏前の燈明の影がほのかに戸からすいて見えた。部屋^{へや}の中
には一人の女の泣き声がして、その室の外と思われる所では、僧
の二、三人が話しながら声を多く立てぬ念仏をしていた。近くに

ある東山の寺々の初夜の勤行も終わったところで静かだった。清水の方角にだけ灯がたくさんに見えて多くの参詣人の気配も聞かれるのである。主人の尼の息子の僧が尊い声で経を読むのが聞こえてきた時に、源氏はからだじゅうの涙がことごとく流れて出る気もした。中へはいつて見ると、灯をあちら向きに置いて、遺骸との間に立てた屏風のこちらに右近は横になっていた。どんなに侘しい気のすることだろうと源氏は同情して見た。遺骸はまだ恐ろしいという気のしない物であった。美しい顔をしていて、まだ生きていた時の可憐さと少しも変わっていなかった。

「私にもう一度、せめて声だけでも聞かせてください。どんな前

生の縁だったかわずかな間の関係であつたが、私はあなたに傾倒した。それなのに私をこの世に捨てて置いて、こんな悲しい目をあなたは見せる」

もう泣き声も惜しまずはばからぬ源氏だった。僧たちもだれとはわからぬながら、死者に断ちがたい愛着を持つらしい男の出現を見て、皆涙をこぼした。源氏は右近に、

「あなたは二条の院へ来なければならぬ」と言つたのであるが、

「長い間、それは小さい時から片時もお離れしませんでお世話になりました御主人ににわかにお別れいたしまして、私は生きて帰

ろうと思う所がございません。奥様がどうおなりになったかということを、どうほかの人に話ができましよう。奥様をお亡く^なしましたほかに、私はまた皆にどう言われるかということも悲しゅうございます」

こう言って右近は泣きやまない。

「私も奥様の煙といっしょにあの世へ参りとうございます」

「もつともだがしかし、人世とはこんなものだ。別れというものに悲しくないものはないのだ。どんなことがあっても寿命のある間には死ねないのだよ。気を静めて私を信賴してくれ」

と言う源氏が、また、

「しかしそういう私も、この悲しみでどうなってしまうかわからない」

と言うのであるから心細い。

「もう明け方に近いころだと思われます。早くお帰りにならなければいけません」

惟光これみつがこう促すので、源氏は顧みばかりがされて、胸も悲しみにふさがらせたまま帰途についた。露の多い路みちに厚い朝霧が立っていて、このままこの世でない国へ行くような寂しさが味わわれた。某院の閨ねやにいたままのふうで夕顔が寝ていたこと、その夜上に掛けて寝た源氏自身の紅の単衣ひとえにまだ巻かれていたこと、など

を思つて、全体あの人と自分はどんな前生の因縁があつたのであろうと、こんなことを途々源氏は思つた。みちみち馬をはかばかしく御して行けるふうでもなかったから、惟光が横に添つて行つた。加茂川堤に来てとうとう源氏は落馬したのである。失心したふうで、「家の中でもないこんな所で自分は死ぬ運命なんだろう。二条の院まではとうてい行けない気がする」

と言つた。惟光の頭も混乱状態にならざるをえない。自分が確しかとした人間だったら、あんなことを源氏がお言いになつても、軽率にこんな案内はしなかつたはずだと思つと悲しかった。川の水で手を洗つて清水きよみずの観音を拝みながらも、どんな処置をとるべき

だろうと煩悶はんもんした。源氏もしいて自身を励まして、心の中で御仏みほとけを念じ、そして惟光たちの助けも借りて二条の院へ行き着いた。

毎夜続いて不規則な時間の出入りを女房たちが、

「見苦しいことですね、近ごろは平生よりもよく微行おしのびをなさる中でも昨日きのうはたいへんお加減が悪いふうだったでしょう。そんなでおありになってまたお出かけになったりなさるのですから、困ったことですね」

こんなふうに歎息たんそくをしていた。

源氏自身が予言をしたとおりに、それきり床について煩ったのである。重い容体が二、三日続いたあとはまた甚はなはだしい衰弱が見え

た。源氏の病氣を聞こし召した帝みかども非常に御心痛あそばされてあちらでもこちらでも間断なく祈祷きとうが行なわれた。特別な神の祭り、祓はらい、修法しゅほうなどである。何にもすぐれた源氏のような人はあるいは短命で終わるのではないかといって、一天下の人がこの病氣に関心を持つようにさえなった。

病床にいながら源氏は右近を二条の院へ伴わせて、部屋へやなども近い所へ与えて、手もとで使う女房の一人にした。惟光これみつは源氏の病の重いことに顛倒てんとうするほどの心配をしながら、じつとその気持ちをおさえて、馴染なじみのない女房たちの中へはいった右近のたよりなさそうなのに同情してよく世話をしてやった。源氏の病の少し

樂に感ぜられる時などには、右近を呼び出して居間の用などをさせていたから、右近はそのうち二条の院の生活に馴なれてきた。濃い色の喪服を着た右近は、容貌ようぼうなどはよくもないが、見苦しくも思われぬ若い女房の一人と見られた。

「運命があの人に授けた短い夫婦の縁から、その片割れの私ももう長くは生きていないのだろう。長い間たよりにしてきた主人に別れたおまえが、さぞ心細いだろうと思うと、せめて私に命があれば、あの人の代わりの世話をしたいと思ったこともあったが、私もあの人のあとを追うらしいので、おまえには気の毒だね」

と、ほかの者へは聞かせぬ声で言って、弱々しく泣く源氏を見

る右近は、女主人に別れた悲しみは別として、源氏にもしまたそんなことがあれば悲しいことだろうと思った。二条の院の男女はだれも静かな心を失って主人の病を悲しんでいるのである。御所のお使いは雨の脚あしよりもしげく参入した。帝の御心痛が非常なものであることを聞く源氏は、もったいなくて、そのことによって病から脱しようとみずから励むようになった。左大臣も徹底的に世話をした。大臣自身が二条の院を見舞わない日もないのである。そしていろいろな医療や祈き禱とをしたせいでも、二十日ほど重態だったあとに余病も起こらないで、源氏の病気は次第に回復していくように見えた。行ゆき触ふれの遠慮の正規の日数もこの日で終わ

る夜であつたから、源氏は逢^あいたく思^{おほしめ}召^{みかど}す帝の御心中を察して、御所の宿直所^{とのいどころ}にまで出かけた。退出の時は左大臣が自身の車へ乗せて邸^{やしき}へ伴^よつた。病後の人の謹慎のしかたなども大臣がきびしく監督したのである。この世界でない所へ蘇^{そせい}生した人間のように当分源氏は思った。

九月の二十日ごろに源氏はまったく回復して、瘦^やせるには瘦せ^{えん}たがかえって艶^{えん}な趣の添^そつた源氏は、今も思いをよくして、またよく泣いた。その様子に不審を抱く人もあつて、物怪^{もののけ}が憑^ついてい^るのであろうとも言っていた。源氏は右近を呼び出して、ひまな静かな日の夕方に話をして、

「今でも私にはわからぬ。なぜだれの娘であるということをもどこまでも私に隠したのだろう。たとえどんな身分でも、私があればどの熱情で思っていたのだから、打ち明けてくれていいわけだと思つて恨めしかった」

とも言つた。

「そんなにどこまでも隠そうなどとあそばすわけはございません。そうしたお話をなさいます機会がなかったのじゃございませんか。最初があんなふうでございましたから、現実の關係のようには思われたいとお言いになつて、それでもまじめな方ならいつまでもこのふうで進んで行くものでもないから、自分は一時的な対

象にされているにすぎないのだとお言いになつては寂しがつていらつしゃいました」

右近がこう言う。

「つまらない隠し合いをしたものだ。私の本心ではそんなにまで隠そうとは思っていなかった。ああいった関係は私に経験のないことだったから、ばかに世間がこわかったのだ。御所の御注意もあるし、そのほかいろんな所に遠慮があつてね。ちよつとした恋をしても、それを大問題のように扱われるうるさい私が、あの夕顔の花の白かった日の夕方から、むやみに私の心はあの人へ惹ひかれていくようになって、無理な関係を作るようになったのもしば

らしくかない二人の縁だったからだと思われる。しかしまた恨めしくも思うよ。こんなに短い縁よりないのなら、あれほどにも私の心を惹いてくれなければよかったとね。まあ今でもよいから詳しく話してくれ、何も隠す必要はなかろう。七日七日に仏像を描^かかせて寺へ納めても、名を知らないではね。それを表に出さないでも、せめて心の中でだれの菩提^{ぼだい}のためにと思いたいじゃないか」

と源氏が言った。

「お隠しなど決してしようとは思っておりません。ただ御自分のお口からお言いにならなかったことを、お亡^{かく}れになってからお

しゃべりするのは済まないような気がただけでございます。御
両親はずっと前にお亡^なくなりになったのでございます。殿様は三^{さん}
位中將でいらっしやいました。非常にかわいがっていらっしやい
まして、それにつけても御自身の不遇をもどかしく思召^{おぼしめ}したで
しょうが、その上寿命にも恵まれていらっしやいまして、お若
くてお亡^なくなりになりましたあとで、ちよつとしたことが初めて
頭中將^{とうちゅうじょう}がまだ少將でいらっしったころに通っておいでになるよう
になったのでございます。三年間ほどは御愛情があるふうで御関
係が続いていましたが、昨年の秋ごろに、あの方の奥様のお父様
の右大臣の所からおどすようなことを言ってまいりましたのを、

気の弱い方でございましたから、むやみに恐ろしがつておしまいになりました、西の右京のほうに奥様の乳母めのとが住んでおりました家へ隠れて行っていらっしゃいましたが、その家もかなりひどい家でもございましたからお困りになって、郊外へ移ろうとお思いになりましたが、今年は方角が悪いので、方角避よけにあの五条の小さい家へ行っておいでになりましたことから、あなた様がおいでになるようなことになりました、あの家があの家でございますから侘わびしがつておいでになったようでございます。普通の人はまるで違うほど内気で、物思いをしていると人から見られるだけでも恥ずかしくてならないように思いになりました、どんな苦し

いことも寂しいことも心に納めていらしたようでございます」

右近のこの話で源氏は自身の想像が当たったことで満足ができたとともに、その優しい人がますます恋しく思われた。

「小さい子を一人行方不明ゆくえにしたと言って中將が憂鬱ゆううつになつていたが、そんな小さい人があつたのか」

と問うてみた。

「さようでございます。一昨年の春お生まれになりました。お嬢様で、とてもおかわいらしい方でございます」

「で、その子はどこにいるの、人には私が引き取ったと知らせないようにして私にその子をくれないか。形見も何もなくて寂しく

ばかり思われるのだから、それが実現できたらいいね」

源氏はこう言って、また、

「頭中将にもいずれは話をするが、あの人をああした所で死なせてしまったのが私だから、当分は恨みを言われるのがつらい。私の従兄いとこの中将の子である点からいっても、私の恋人だった人の子である点からいっても、私の養女にして育てていいわけだから、その西の京の乳母にも何かほかのことにして、お嬢さんを私の所へつれて来てくれないか」

と言った。

「そうになりましたらどんなに結構なことでございましょう。あの

西の京でお育ちになつてはあまりにお氣の毒でございます。私ども若い者ばかりでしたから、行き届いたお世話ができないということであつちへお預けになつたのでございます」

と右近は言つていた。静かな夕方の空の色も身にしむ九月だつた。庭の植え込みの草などがうら枯れて、もう虫の声もかすかにしかなかった。そしてもう少しずつ紅葉もみじの色づいた絵のような景色けしきを右近はながめながら、思いもよらぬ貴族の家の女房になつてゐることを感じた。五条の夕顔の花の咲きかかった家は思い出すだけでも恥ずかしいのである。竹の中で家鳩いえばとという鳥が調子はずれに鳴くのを聞いて源氏は、あの某院でこの鳥の鳴いた時に夕

顔のこわがった顔が今も可憐^{かれん}に思い出されてならない。

「年は幾つだったの、なんだか普通の若い人よりもずっと若いよ
うなふうに見えたのも短命の人だったからだね」

「たしか十九におなりになったのでございましょう。私は奥様の
もう一人のほうの乳母の忘れ形見でございましたので、三位^{さんみ}様が
かわいがってくださいますて、お嬢様といっしょに育ててくださ
いましたものでございます。そんなことを思いますと、あの方の
お亡^なくなりになりましたあとで、平気でよくも生きているものだ
と恥ずかしくなるのでございます。弱々しいあの方をただ一人の
たよりになる御主人と思つて右近は参りました」

「弱々しい女が私はいちばん好きだ。自分が賢くないせい、あまり聡明^{そうめい}で、人の感情に動かされないような女はいやなものだ。どうかすれば人の誘惑にもかかりそうな人でありながら、さすがに慎^{つつ}ましくて恋人になった男に全生命を任せているというように、人が私は好きで、おとなしいそうした人を自分の思うように教えて成長させていければよいと思う」

源氏がこう言うと、

「その好みには遠いように思われません方の、お亡^{かく}れになったことが残念で」

と右近は言いながら泣いていた。空は曇って冷ややかな風が

通っていた。

寂しそうに見えた源氏は、

見し人の煙を雲とながむれば夕ゆふへの空もむつまじきかな

と独言ひとりごとのように言っているも、返しの歌は言い出されないで、

右近は、こんな時に二人そろっておいでになつたらという思いで

胸の詰まる気がした。源氏はうるさかった砧きぬたの音を思い出しても

その夜が恋しくて、「八月九月正長夜まさにながきよ、千声万声無止時せんせいばんせいやむときなし」と歌っ

ていた。

今も伊予介いよのすけの家の小君こぎみは時々源氏の所へ行つたが、以前のよう
に源氏から手紙を託されて来るようなことがなかった。自分の冷
淡さに懲りておしまいになつたのかと思つて、空蟬うつせみは心苦しかつ
たが、源氏の病氣をしていることを聞いた時にはさすがに歎かれ
た。それに良人おっとの任国へ伴われる日が近づいてくるのも心細く
て、自分を忘れておしまいになつたかと試みる気で、
このごろの御様子を承り、お案じ申し上げてはおりますが、そ
れを私がどうしてお知らせすることができましよう。

問はぬをもなどかと問はで程ふるにいかばかりかは思ひ乱る

る

苦しかるらん君よりもわれぞ益田ますだのいける甲斐かひなきという歌が
思われます。

こんな手紙を書いた。

思いがけぬあちからの手紙を見て源氏は珍しくもうれしくも
思った。この人を思う熱情も決して醒さめていたのではないのであ
る。

生きがいがないとはだれが言いたい言葉でしょう。

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命
よ

はかないことです。

病後の慄えふるの見える手で乱れ書きをした消息は美しかった。蝉せみの脱殻ぬけがらが忘れずに歌われてあるのを、女は気の毒にも思い、うれしくも思えた。こんなふう到手紙などでは好意を見せながらも、これより深い交渉に進もうという意思は空蟬になかった。理解のある優しい女であつたという思い出だけは源氏の心に留めておきたいと願っているのである。もう一人の女は蔵人少将くろうでと結婚した

という噂うわさを源氏は聞いた。それはおかしい、処女でない新妻を少将はどう思うだろうと、その良人おっとに同情もされたし、またあの空蝉ままむすめの継娘はどんな気持ちでいるのだろうと、それもありたさに小君を使いにして手紙を送った。

死ぬほど煩悶はんもんしている私の心はわかりますか。

ほのかにも軒ばの荻をぎをむすばずば露のかごとを何にかけまし

その手紙を枝の長い荻おぎにつけて、そつと見せるようにとは言ったが、源氏の内心では粗相そそうして少将に見つかった時、妻の以前の

情人の自分であることを知ったら、その人の気持ちは慰められるであろうという高ぶった考えもあった。しかし小君は少将の来ていないひまをみて手紙の添った荻の枝を女に見せたのである。恨めしい人ではあるが自分を思い出して情人らしい手紙を送って来た点では憎くも女は思わなかった。悪い歌でも早いのが取柄とりえであろうと書いて小君に返事を渡した。

ほのめかす風につけても下荻したをぎの半は霜なかばにむすぼほれつつ

下手へたであるのを洒落しやれた書き方で紛らしてある字の品の悪いも

のだった。灯ひの前にいた夜の顔も連想れんそうされるのである。碁盤を中にして慎み深く向かい合ったほうの人の姿態にはどんなに悪い顔だちであるにもせよ、それによつて男の恋の減じるものでないよさがあつた。一方は何の深味もなく、自身の若い容貌ようぼうに誇つたふうだったと源氏は思い出して、やはりそれにも心の惹ひかれるのを覚えた。まだ軒端の萩との情事は清算されたものではなさそうである。

源氏は夕顔の四十九日の法要をそつと叡山えいざんの法華堂ほっけどうで行なわせることにした。それはかなり大層なもので、上流の家の法会ほうえとしてあるべきものは皆用意させたのである。寺へ納める故人の服も

新調したし寄進のものも大きかった。書写の経巻にも、新しい仏像の装飾にも費用は惜しまれてなかった。惟光これみつの兄の阿闍梨あじゃりは人格者だといわれている僧で、その人が皆引き受けてしたのである。源氏の詩文の師をしている親しい某文章博士もんじょうはかせを呼んで源氏は故人を仏に頼む願文がんもんを書かせた。普通の例と違って故人の名は現わさずに、死んだ愛人を阿弥陀仏あみだぶつにお託しするという意味を、愛のこもった文章で下書きをして源氏は見せた。

「このままで結構でございます。これに筆を入れるところはございません」

博士はこう言った。激情はおさえているがやはり源氏の目から

は涙がこぼれ落ちて堪えがたいように見えた。その博士は、

「何という人なのだろう、そんな方のお亡^なくなりになったことなど話も聞かないほどの人なのに、源氏の君があんなに悲しまれるほど愛されていた人というのはよほど運のいい人だ」

とのちに言った。作らせた故人の衣裳^{いしやう}を源氏は取り寄せて、袴^{はかま}の腰に、

泣く泣くも今日^{けふ}はわが結^ゆふ下紐^{したひも}をいづれの世にか解けて見る
べき

と書いた。四十九日の間はなおこの世界にさまよっているとい
う霊魂は、支配者によって未来のどの道へ赴^{おもむ}かせられるのである
うと、こんなことをいろいろと想像しながら般若心経^{はんにやしんぎょう}の章句を唱
えることばかりを源氏はしていた。頭中将に逢^あうといつも胸騒ぎ
がして、あの故人が撫子^{なでしこ}にたとえたという子供の近ごろの様子な
どを知らせてやりたく思ったが、恋人を死なせた恨みを聞くのが
つらくて打ちいでにくかった。

あの五条の家では女主人の行くえが知れないのを捜す方法もな
かった。右近^{うこん}までもそれきり便^{たよ}りをして来ないことを不思議に思
いながら絶えず心配をしていた。確かなことではないが通つて来

る人は源氏の君ではないかといわれていたことから、惟光になんらかの消息を得ようとしたが、まったく知らぬふうで、続いて今も女房の所へ恋の手紙が送られるのであったから、人々は絶望を感じて、主人を奪われたことを夢のようにばかり思った。あるいは地方官の息子などの好色男が、頭中将を恐れて、身の上を隠したままで父の任地へでも伴って行ってしまったのではないかとついにはこんな想像をするようになった。この家の持ち主は西の京の乳母めのとの娘だった。乳母の娘は三人で、右近だけが他人であつたから便りを聞かせる親切がないのだと恨んで、そして皆夫人を恋しがった。右近のほうでは夫人を頓死とんしさせた責任者のように言

われるのをつらくも思っていたし、源氏も今になって故人の情人が自分であつた秘密を人に知らせたくないと思うふうであつたから、そんなことで小さいお嬢さんの消息も聞けないままになつて不本意な月日が両方の間にたつていった。

源氏はせめて夢にでも夕顔を見たいと、長く願っていたが比叡ひえいで法事をした次の晩、ほのかではあつたが、やはりその人のいた場所は某それがしの院で、源氏が枕まくらもとにすわつた姿を見た女もそこに添つた夢を見た。このことで、荒廃した家などに住む妖怪あやかしが、美しい源氏に恋をしたがために、愛人を取り殺したのであると不思議が解決されたのである。源氏は自身もずいぶん危険だったこと

を知って恐ろしかった。

伊予介いよのすけが十月の初めに四国へ立つことになった。細君をつれて行くことになっていたから、普通の場合よりも多くの餞別品せんべつが源氏から贈られた。またそのほかにも秘密な贈り物があった。ついでに空蟬うつせみの脱殻ぬけがらと言った夏の薄衣うすものも返してやった。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖そでの朽ちにけるかな

細々こまごましい手紙の内容は省略する。贈り物の使いは帰ってしまっ

たが、そのあとで空蝉は小君こぎみを使いにして小桂こうちぎの返歌だけをした。

蝉の羽もたち変へてける夏ごろもかへすを見ても音ねは泣かれ
けり

源氏は空蝉を思うと、普通の女性のとりえない態度をとり続けた女ともこれで別れてしまうのだと歎なげかれて、運命の冷たさというようなものが感ぜられた。

今日きょうから冬の季にはいる日は、いかにもそれらしく、時雨しぐれがこ

ぼれたりして、空の色も身に沁しんだ。終日源氏は物思しいをしていて、

過ぎにしも今日別るも二みちに行く方かた知らぬ秋の暮くれかな

などと思っていた。秘密な恋をする者の苦しさが源氏にわかったであろうと思われる。

こうした空蟬とか夕顔とかいうようなはなやかでない女と源氏のした恋の話は、源氏自身が非常に隠していたことがあるからと思つて、最初は書かなかったのであるが、帝王の子だからといつ

て、その恋人までが皆完全に近い女性で、いいことばかりが書かれていないかといって、仮作したもののように言う人があつたから、これらを補って書いた。なんだか源氏に済まない気がする。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
